

## 雑事記 (29)

盛丘 由樹年

### 気になる言葉の研究 (2)

① さおさす (棹差す)

夏目漱石『草枕』の有名な出だし——

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

著者は、人の世を渡るには智と情と意地のバランスが微妙必要だろうと考えている。率直に言って、これは弱音であり、嘆きだ。生きづらさをぼやいている。

そんなところに人間らしい本音がもれており、名文としての評価が高い。でも、比喩的表現だから、この解釈がなかなか難しい。なかでも「情に棹させば流される」とは、ピンとこない。情に対してどういう行為をしていることなのか、よくわからないのだ。

考察すると、小説の出だしなのに、主語がないことに気づく。主人公の正体を明かない意味があるのかもしれない。この場合、主語はこれ考えた本人、つまり、私あるいは自分だろうが、その内容に登場するのは、一般的な人と解すべきだろう。いずれにせよ、こ

れはたいした問題ではない。

情とはもちろん、情けであり、感情であり心情のことだ。(ある辞書のように「情＝主観的な意識」などと説明を加えると、逆に難しくなる)

つぎの棹さすに注意を要す。棹さすとは、そもそも、棹で川や堀の底をついて小舟を前進させることだ。人によつては棹さすを何かに抵抗するようなイメージを持ち、「情に逆らつて行動することだ」と解釈するかもしれない。広辞苑第六版でも、棹さすを引くと、「時流にさからう意に誤用することがある」と語釈されている。大勢の人が誤用すれば、それがひとつの解釈として成立する。しかし、だからといって文章をへたに曲解しては、漱石先生に失礼になる。漱石先生が誤用したとは思えない。

私も最初は、棹さすを「流れに逆らう」という意味にとらえていた。その解釈では、納得のいかないところがあった。情けに反して行動すると、流されるものだろうか。

むしろ、自分の感情のままに行動したり、人に情けをかけたりますると、ほとんどよい結果にはならない。情けを振り切る方が、結果的によいことが多いから、すつきりしなかった。そのうち、『草枕』の場合は本来の「舟を前進させる」の意味でとらえるべきであると気づいた。漱石先生は、情のおもむくままに行くと流されるよ、と警告していることになる。流されるとは、水難の危険が迫ることでもある。要するに、「情にほだされると、自分の力では後戻りできないような、やっかいな状況に追い込まれるから、いやなんだ」と、漱石先生はぼやいていっているわけだろう。

## ② 汚名をそそぐ

人々は名にこだわる。この場合、姓名や呼び名ではなく、名声の意味であり、それが高まれば名誉となる。それが蔑あはまされることならば、汚名や悪名ともなる。人が社会生活するうえで、名を気にせざるを得ない。汚名を着せられれば、生きづらいことになる。会社が評判を落とせば、株が下がることになるから、株価がその指標になったりする。人の場合の指標となるものは、賞罰であり、好感度、信用度、尊敬される度合いなどだろう。長のつく肩書きや、選挙の票数も指標と

なるかもしれない。

漢字を用いて「汚名を注ぐ」と書いては、汚名に輪をかけて悪名にしてしまいうだ。汚名を晴らしたいのなら、汚名を濯ぐ（あるいは雪ぐ）でなければならぬ。「そそぐ」と「すすぐ」が、同義語のため、漢字をへたに当てると間違いになるから、恥となる。汚名に関しては、「汚名を挽回する」という誤用がある。これでも、汚名を晴らしたい気持ち伝わるので、誤用とは言いがたいところがある。

## ③ 他山の石

「他山の石」の語句を初めて聞いたときには、何のことやらわからないものだ。そのうち、「他人の失敗を教訓とした場合」にこれが用いられることが多いことに気づく。他者（他社）の失敗事例を教訓にしたいとき、上位者が下位者へ「もって他山の石とせよ」などと説教するものだから、「他人の振り見てわが振りなおせ」と似たような意味の慣用句であることがわかってくる。他山の石の場合、艱難辛苦したのは他人であるということだ。

この出典は、「他山の石以て玉を攻むべし」「詩経小雅、鶴鳴」だそうだ。つまり「他山の石で玉を磨け」

と言っている。

「玉を磨くなら、他山の石を使え」と言い換えることもできそうだ。よその山から出た石は、たとえ粗悪なものであっても、自分の玉を磨く役には立つという意味にもなっている。

「玉を磨く」とは、これも比喻であつて、理解するには小考が必要だ。玉は自己をさしている。寶石の原石は、ただの石ころにしかな見えないものが、磨くことで、輝きが増し、価値あるものになる。人も研鑽に励み、修行を積みあげ、一人前になるというたとえだろう。「艱難辛苦は汝を玉にする」ということわざにも通じる。自分の山の石ではなく、他山の山の石を使えというのは、人の場合、他人との切磋琢磨が上達に効果的なことから、もつともなことだ。

#### ④ かつて

「過去において」という意味で「かつて」が正しいのだが、ある辞書を引くと、話し言葉では「かつて」になることがあると語釈されている。つまり、昔はともかく、近ごろでは「かつて」を間違ひとは言えなくなっている。他人の原稿に「かつて」と書かれていた場合、「かつて」と直すように校注を入れたりしたもの

だが、近ごろ私はそのまま見てみぬふりをしている。

#### ⑤ 二刀流

多くのメディアは、日本プロ野球から近年 メジャー グに行った野球選手大谷翔平のことを「投打の二刀流」といつているが、それは違ふだろうと私は思っている。そもそも野球のピッチャーが打席に立つことは当たり前のことだ。

二刀流と聞くと、私には、彼が二本のバットを持つて打席に立つイメージになる（冗談半分）。メディアは、大きい刀を投球に、もう一方の小さい刀を打撃にたとえて言っているわけだ。両方を使いこなしているから、二刀流と言っているのだろうが、それなら。両刀使いといふべきだろう。それは刀に限らずに、多面的に活動できることをいうから、よりよく言い当てている。しかし、両刀使いは、ある低俗な意味に使われることがある、それを連想させてはまずいようだ。

二刀流とは元々は二本の刀かたなを用いる流儀であり、伝説の劍豪・宮本武蔵がその典型例だ。つまり、大小の両刀を両手に持つ剣術だ。（大刀を片手で振り回すのはさうとう腕力が要る。振り回せたのは小刀だけだろう）

大谷の場合、投手と打者の両方に活躍が期待されているが、考えてみると、野球選手は走攻守において優れていることが求められる。攻守の二つが優れていることは、野手の場合、当たり前のことで、両方優れている選手は何人もいる。しかし、投手の場合は、事情が異なることは確かだ。

プロ野球でのピッチャーは、投球を専門とし、投球練習だけをし、打撃練習などしないのが常識だ。ある意味で怠慢なのだ。ピッチャーは球を投げるだけでよいと割り切っている。バットを持って打席に入っても、立っているだけだ。あるいはわざと空振りしたりして、アウトになってベンチに引き下がるのが当然となっている。つまり、打撃でチームに貢献することなど、ぜんぜん期待されていない。観客たちもそれをよくわかっているから、ブーイングもしない。もしもピッチャーがホームランを打てば、椿事ということになる。なまじ、バットを強振したり、塁間を全力疾走したりすると、投球に影響してしまうから、力を抜いているのだろう。それだけ投球に集中することが求められる。大谷には両方の素質があり、さらに「走」の方もいる。難しいとされる投打を両立させることに挑戦している。監督やコーチにしても、どちらか一方に絞るの

は、惜しい素材と思っているのだろう。打撃が投球に影響するリスクも小さいとみなしているのだろう。たとえ投げる機会がなくても、指名打者制のリーグなら、他の守備につかなくていいから、指名打者でやっていけるかもしれない。ピッチャーでも打者でも、そこ活躍できる大谷の場合を表現するのに、もっと適切な言い方はないものだろうか。

二刀流というより「二人二役」と言い方があるから、二役流、あるいは「二足の草鞋を履く」ことから、二足流、二つのことを追い求めているから、二股流ふたまたでもよさそうだ。

#### ⑥ 櫛を飛ばす

櫛を飛ばすは、叱咤激励する意に近い。声とともにつばも飛んできそうな迫力がある。櫛とは、告知のために木片に書かれた文書のこと（木簡）だそうで、飛ばすものではなく、本来は手渡すものだろう。本来の意味とは曲折しているところがある。櫛が投げつけられてその木片が体に当れば、確かに痛そうだから、言葉のニュアンスとしては合っている。

#### ⑦ フリーマーケット

個人出品のフリーマーケットは近ごろネット上で盛んになり、「フリマ」と略称されてもいる。自分にとって不要になったものを出品できるし、買いたいものにとってはたくさんの物の中から容易に探せて、安く手に入れることができる。

でも、売り買いの自由なマーケットのことではない。この「フリー」は蚤(ひら)の市(いち)のことだ。つまりフリーマーケットとは「蚤の市」のことだ。その名の由来は何だろう。

推測すると、昔のパリではノミはありふれた虫であり、人々がごったがえす中で商品をのぞきこんで見ているうちに、ノミが移ってきてかゆくったりしたのだから、そんな露天の市場を「ノミの市」というようになったのだろう(ウソに近い想像)。

なお、若者たち向けの「フリマ」が、ネット上でない、天井のある比較的広い会場で開催される。「文学フリマ」などといい、出品されるものはマニアックなジャンルのものに限定されていることが多い。区画された出展エリアで、作者自身が手作りした作品を、ほとんど儲けを度外視して展示・販売する。実演もでき、対面するよさがあるから、同好の士が集まる。情報交換の場にもなる。

## ⑧ 顔料

インクには、大きく分けて染料と顔料の2種類ある。絵の具や、繊維の染物などに関しても、同様な種類がある。素材の中に染み込むものと、単に色素が付着するものがあるわけで、使い分ける必要がある。辞書によると、染料は水などに溶けやすく、素材と化学反応して染色が落ちにくくなるもの。顔料は水に溶けにくく、素材と化学反応しないものという。あるとき偶然に、髪の毛を染める方法にも何通りかがあることを知り、わずらわしいことだと思ったりした。

このところ我が家にある複数のインク・ジェット式のプリンターが次々に故障したのは、インクの種類を混同したせいだろうか、少々悔恨している。安いインクを使っていた報いなのかもしれない。(そのため、今年の年賀状は手書きにせざるをえなかった) それにしても、顔料になぜ「顔」の字が使われるのか、不思議に思っている。

## ⑨ 色

インクといえ、色だ。色にもいろいろあって、おもしろい。特殊な意味もあるから、すみにおけない。

「いろは」のいろとは何だろうと思ひ、改めて調べてみると、手習歌「色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢見じ酔ひもせず」の色とは、花のこのようだが、姿かたちを指しているのだとも解せる。色は基本的に、実体があつて目に見えるものをいうが、その手習歌は匂いも放つと言つてゐる。匂いを出すものは実体があるので、当然のことだろう。この場合、それが何であるかを特定せず、読み手の想像に任せてゐる。あいまいなどころに歌の奥深さがあるのだろうが、ほんのさわりだけでもむずかしい言葉の遊びになつており、私はその先を解説するのはあきらめよう。

色即是空の色とは、色欲のことだと思つていたが、本当はもつと広い範囲のことを言うらしい。つまり、目に見える物質の全般を言つてゐる。その中には色気の在るものも、当然ながら、含まれる。

### ⑩ 水準

水準点といへば、地学的な、海面の高さを基点とするものだが、水準は拡大され、水とは無関係に標準的な「レベル」として使われている。「水」を付けた方の語調がよくなるためだろうが、私には水に流せない

ところがある。

たとえば、生活水準がある。これは、生活水のことではない。でも、生活水準が高くなると、水の使用量が多くなる傾向があるし、高層マンションでは高い階に住む住民は低い階の住民より裕福な傾向があるという。

### ⑪ 水増し

水増しといつても、水を増やすわけではない。単に数量を増すことだ。これも「水」の意味を失つてゐる。数量を多く見せかけるために不正な操作を行うイメージをついてゐる。語源がそう説明されている。それなら「見せかけ増し」とでも書きたい。

### ⑫ 無数・無量

無数とは、もちろん、数え切れないほど多いことを意味する。しかし、無数をじつと見ると、数が無いのだから、「ゼロ」のことか、と思えてくる。無量にしても、量がないのだから、「なし」とも受け取れる。誤解が生じないように、無数を無限大数とも言い換えたいところだ。

### ⑬ 格差

格差といっても、格の差があるわけではない。単に差があるだけだ。「格」とは無関係なことにも、人々は「格差」と言いたがる。「差」とだけ言つたんでは、味気ないのだろうか。拡大解釈的に用いられている言葉だから、「格差」と書くより「拡張」と書く方がよいかもしれない。

たとえば、賃金格差、所得格差という言葉がある。お金に「格」があるとは考えにくい。あるのは「額」の違いがあるだけだろう、と私は思う。だから、賃金額差、所得額差というほうが正確だろう。その数値の大小で、クラス分けされることになる。

そして人々は、多様性を認めても、格差を認めたくない。社会には、いやがおうにも、格差が厳然として存在する。フランスから来た某氏のように、強欲な人がいて格差をどんどん広げている。それがあまり大きく広がると、やつかみが強くなる。格差には、うらやましさを、ひがみのイメージがつくようになっていく。

ただし、商品には価格があることを思い出すと、お金にも「格」があるわけだ。それは通貨の数値で表されるのだから、わかりやすい。物には価格がつけられ

るが、価格が同じでも、人によってその価値の軽重があり、必要度や期待度によって上下するところがおもしろい。

所得格差でいえば、分布の広がりが問題になる。格差が広がったことを示すには、統計の図表を示せばわかりやすいし、数学的な指標で表現したいところだ。

クラスというと、私が高校生のとき、実質的に学力差でクラス分けされたことを思い出す。学力差が、一般的に社会に出ると格差になることは、一般的に信じられている俗説だろうし、ばらつきが大きいとしても、やはり相関があるだろう。

それにしても、品格や人格を数値で表すことは難しいようだ。

### ⑭ 「潜伏」と「かくれ」

「潜伏キリシタン」と「かくれキリシタン」には、歴史学的に厳密な定義があつて、学者や専門家の間ではそれらを使い分けているらしい。でも、そんな説明はここでは略したい。潜伏とかくれの言葉を使ってそれを区別する方がおかしいとさえ私は思う。専門家の間だけでしか理解されていないことだろう。

今般、世界遺産の登録で政府や地元が「潜伏キリシ

タン」の名称で申請したことに私は違和感を持つ。それらには微妙なニュアンスの違いしかないから、どちらでもよいことだろうけど、一般的にも、かくれキリシタンの方になじみがある。それに、「潜伏」の言葉のイメージには、微妙なやましさがある。語感が悪いのだ。

潜伏には悪者がこそこそしながら潜ひそんでいるイメージがあるのに対し、「かくれ」には弱者が権力者の弾圧にじつと耐えしので表に出られない風情がある。潜伏キリシタンでは逃亡している悪人のイメージが付きまとうし、彼らを差別する雰囲気ふんぎが漂う。潜伏逃亡者、潜伏ウイルス、潜伏期間など、よくないイメージの用法が多い。潜伏していたものが姿を現したとき、事件になるが、かくれていたものが姿を現せば、一安心だろう。

### ⑮ 「わるい」と「失礼」

自分が失策したりして謝るとき、「わるい」と言ったり「失礼！」と言ったりする。一言で謝意が伝わり、誤解されたりはしないだろうけれど、できれば過去形で言っただけがいい。「悪かった」「失礼した」と。さらに言えば、主語を付けて、「私が悪かった」「私が失礼し

た」とすれば、明確に通じる意味になる。でも、英語でも、「sorry」とだけ簡略することが多い（間投詞扱い）。

「ごめん」も「御免なされ」の簡略形だが、さらに「めん」の一言にはできないだろうかと、ふと思った。剣道の「メン！」と紛らわしくなるから、余計なことだった。

### ⑯ Aさんじゃないけれど

「Aさんじゃないけれど」という言い回しに、私はとまどいを感じたことがある。「Aさんじゃない」と言っているのに、話し手は、Aさんが言ったことなどを引用してくる例がほとんどだ。「ない」という否定する言葉が、否定でなくなっている。「ないけれど」という表現が曲者なのだ。「ない」と否定しつつも、「けれど」の言葉でさらに逆転させている構造になっているから、ややこしい。話し手は、否定の否定で肯定しているつもりなのかもしれない。

省略されている言葉の中に、それを理解するための鍵があるのかもしれない。「Aさんじゃない」に省略されている主語は「私」だ。私はAさんじゃない、とわざわざ断りを入れてから、Aさんの言葉を引用する。

つまり実質的に、引用することの前置きになつてゐる。この言い回しは、「私はAさんじゃないけれど、Aさんがよく言っている言葉を引用すると……」という文節を一気に省略したものだと言釈することによつて、ようやく理解できる。

また、「歌の文句じゃないけれど」という例もある。話し手が「歌の文句じゃない」と完全否定しているのに、その次の語句として、歌の文句の中から言葉引用するのだから、私としては、理解に苦しむ。

「歌の文句じゃないと言っているのに、なぜ歌の文句を引用するのか？ おかしいだろ！」と厚切りジェイソン（ヤンキー風の外国人タレント）がわめき散らしそうなことだ。

ことばの関係性を無視するような、超絶表現なのだ。それより「歌の文句にあるように」と言い換えたほうがよいと私は思う。あるいは「歌の文句だけ（だけれど）……」というべきだろう。

### ⑰ 塩対応

対応の仕方にもいろいろあつて、神対応があれば、塩対応もある。塩対応と聞いて中には「敵に塩を送る」対応か、と思う人がいるかもしれない。そうではなく、

若い人の間では、「塩辛い<sup>しおかた</sup>対応をする」意味に使われている。おおむね上位の人が下位の若い人のちやらかした言動に対し、いましめたり逆手に取ったりする意味で使われている。つまり、対応に塩味を効かせるものであり、甘くないわけだ。

若い人に「敵に塩を送る」と言つたら、完全に別の意味に受け取られそうだ。ある若者「ああ、それは、敵の捕虜などを虐待する、ということですね」